

## 「物語る窓」から「物語」へ



ステインドグラス作家

たち ばな え つ こ  
**立花 江津子** さん

中世から続く技法を用いて制作する国際的ステインドグラス作家の立花江津子さん。国内外のさまざまな施設に200点以上の作品を提供し、姫路にはパルナソスホールをはじめ姫路カトリック教会、姫路市立美術館など30カ所に設置されています。

クラシック音楽や邦楽、日本舞踊、油絵など多岐にわたる芸術にふれて育ち、小学生の頃には学芸会などの台本を担当。中学時代には岡本綺堂「修善寺物語」を教師と生徒共同で上演したほか、大阪文楽座での清元公演にも出演。高校では演劇部に所属。バレエやオペラ、歌舞伎などの舞台芸術に興味を持ち、武蔵野美術短期大学で舞台美術を学びますが、卒業後は絵画の道へ。ある日、姫路市内の修道院でベルギー人の神父が制作するステインドグラスを見学し、たちまち魅了されました。「光の創造者として光をコントロールする」芸術を学びたいとの思いが募り、神父に紹介されたベルギーの美術大学へ留学しました。

現在も制作を続ける一方で、ここ数年は浄瑠璃や歌舞伎などの台本を執筆しています。2年前には小泉八雲の怪談「水飴を買う女」が人間国宝の豊竹嶋太夫さんにより鳥根県松江市で初演されました。「大学時代の知り合いで文藝春秋の元編集長と数年前にめぐり会い、作品を読んでもらったところ『八雲の怪談を浄瑠璃にしませんか』と勧められ、実現しました」

10月6日(土)には新作「鶴女房」とあわせて2作を松江市で上演するほか、前日の5日(金)には姫路文学館で新作「播磨国風土記より『神代の子捨て』」を上演します。粗暴なため父神に島に捨てられた子神が怒って嵐を起し父の船を転覆させ、さまざまな積荷などが落ちたところが十四の丘になったという物語で、姫路城のある姫山の由来が語られます。嶋太夫さんによる上演に先立ち古典芸能解説者の葛西聖司さん、播磨学研究所研究員の埴岡真弓さんの解説もあり、舞台まわりにはステインドグラスに使う色板ガラスを配置する試みも。

「神代の一」の続編で、姫路城天守に祀られている富姫を描いた浄瑠璃(清元)「姫山早希想夫憐」の準備も進んでおり、この2作は来年に上演が予定されています。また「姫山の物語『灯火を継ぐ』」を共通テーマにもう1作を加え、神代から現在の姫路城に至る3作を集めたオムニバス作品も企画中とのこと。「歌舞伎、浄瑠璃、語りなどで構成し、ステインドグラスや照明を駆使した新しい演劇のかたちとして、さまざまなジャンルの仲間と共に世界に発信したい。『音楽のまち・ひめじ』に邦楽の分野で貢献できれば」と立花さん。「光の窓」「物語る窓」とも呼ばれるステインドグラスから「物語」の世界へ、立花さんの表現の旅は続きます。

※詳細は8ページをご覧ください。

### 表紙解説

書写の里・美術工芸館

「染付福祿寿図燭台」 染付銘:東山 新収蔵品(受贈)

姫路城世界遺産登録25周年記念

特別展示「姫路藩窯 東山焼」展 出品作品

会期:10月21日(日)まで

2点で一对のこういった燭台は東山焼とうざんやきでよくみられる作品ですが、傷もなく高さが51センチもある最大級サイズのもの貴重です。写真の作品には、胴部に書かれた「寿」の篆書文字の横に蝠

蝠と鹿がいます。これは中国で流行した図柄で、蝙蝠の読み方が「福」、鹿は「禄」に通じることから、組み合わせで福祿寿を意味する吉祥文様となっています。

東山焼は現在の姫路市東山の興禅寺山窯で始まったやきもので、のちに男山窯(現・山野井町)に移され、磁器を中心に染付や青磁の優れた作品が焼かれました。徳川家齊の娘喜代姫が、姫路藩の次期藩主となる酒井忠学へ輿入れすることが決まった文政5年(1822)から、実際の輿入れの天保3年(1832)に至るまでの間を中心に、姫路藩の管理の下、将軍家や他藩への贈答にふさわしい作品が作られました。